

生徒指導の原則

Useful Tips for Educating Students in the Class room

赤坂雅裕*

Masahiro AKASAKA

○ はじめに

「教員を5段階で評価する。相対評価で5%を最低ランクに割り振ろう」

「生徒の保護者による教員評価を導入すべきだ。そして、指導力不足教員対策を行う」

教育改革論議が盛んである。

盛んなのは大いに結構だが、これはいったいどういうことか。

議論の底流に「悪いのは教師・学校である」という「きめつけ」を感じる。

「学力低下」「いじめ」「不登校」などの問題があるのは、学校や教師のあり方に問題があるからだと単純に割り切ってしまう「学校原因論」や「教師悪者論」が、その根底にある。

違う。

今日の「教育問題」の原因は、多元的・複合的なのである。

それをまったく理解できておらず、浅薄な思想で教育改革を推し進めようとしている。

危険である。

このままでは教育現場はいよいよ混乱し、学校は「人間を育てる」という本来の姿からなおさら遠のいていくのではないかと危惧する。

私は、小・中・高校の現場をよく訪問する。

そして、実感する。「日本の教師たちは、きわ

めて優れている」と。

「この過酷な現状のなかで、よくぞここまで頑張ってください」と心から思う。

子どもたちにあたたかいまなざしで心優しく根気強く指導されるお姿を見て、感動し、涙が出そうになることもしばしばである。

いま必要なことは、先生方を信じ、先生方を応援することである。

先生方のあらを探し、批判し、おとしめることではない。

今回、先生方の常日頃のご努力に感謝し、先生方のお仕事のお役に立ちたいと思い、先達の英知を集めた「生徒指導の原則」をまとめることを思い立った。

現場のお忙しいなかでも、先生方が、生徒指導の要点をサッと読めるように書いたつもりである。

先生方のご実践の指針になることができれば幸いである。

(1) 生徒指導の基本

余程の理由なくして、誰も人としての道を踏み外そうとはしない。

問題を起こしたくて起こしているのではない。

荒れる理由は、ただ一つ。

* 文教大学国際学部准教授

愛されたいから。

いままで自分の思うように愛してくれなかったから、思春期になったいま暴れているのです。

「非行」は、愛をさがし求める子どもたちのギリギリの悲しい行為である。
心の寂しさを埋めるために子どもは非行に走る。

非行に走った子どもたちの背後に、現代の辛辣な生活の中で心を病んだおとなたちがいることがある。

まったく問題がなく育ってきたのに、ある日突然非行に走る、突然自分の体を傷つけるということはあり得ない。
また、その要因の多くは親との関係性のなかで生じている。
すべての問題行動は乳幼児期からの連続性の上で生じている。
人間の問題のほとんどが「連続」の中で生じている。

思春期の荒れは、突然起こるものではない。
乳幼児期からつながっている。

「上農は草を見ずして草を取る。中農は草を見て草を取る。下農は草を見て草を取らず」
優れた教育者（親・教師）は、子どもの「荒れ」が表面化する思春期の前に、十分に手を入れている。

大切に育てられてきた子は、人を大切に作る。
粗末に育てられ、傷つきながら育ってきた子は、人も自分自身をも粗末にする。

犯罪は、人の悲しみを感ずることができない人がおかすもの。
子どもは人の悲しみを感ずることができるように育てなければならぬ。
そのためには、まずは、子どもが自分の悲し

みをおとなに感じてもらうこと。

子どもが自分の悲しみをわが事のように悲しんでくれる人に出会うことが大切である。

教師が、荒れる子を、「なんて不憫だ」と思っ
てあげることが、まず大切。

暴走族の若者もできることなら、もう少し社会的に認知される、許容される集団で何かをしたいという気持ちを持っている。
ゆえに、いつまでも暴走族をやっている人はいない。

人間には、できることなら、社会的に認知され、許容され、承認される集団のなかでアイデンティティを發揮したいという気持ちがある。どの子にもある。

人間にクズはない。誰でもどこかに必ず値うちを持っている。
その値うちを見つけ、自信と誇りを育ててやれば、やけを起こしたりはしない。

「自分が相手の中にあると信じたものが相手の中で育ってくる」（ハルトマン）
「この子は良い子だ。こういう良いところがある」と教師が信じれば、それがその子どものなかで育ってくるというのだ。
逆に、「この子はずるい子だ」と信じたら、その子はずるい子になるというのだ。

ほめることができない第一の理由は、ほめる点が思いつかないということ。
つまり関心があまりないということ。
それは愛がないということである。

悪くなる時は一直線に急激に悪くなっていく。
よくなる時はジグザクの形で少しずつよくなっていく。

「問題児」は、我々おとなに「問題」を提起

してくれている子ども。

なにか問題が起こってきたときは、おとなよ、考え直せ、ということ。

「問題児」に学ぼう。

□問題行動を、教師に対する「訴え」として受けとめる。

そのかげに隠されている生徒の本当の不満、願いを察知して、それに応える積極的で多様な取り組みを根気強く行うこと。

□子どもの生きる力は、「悪」の形を取って表れてくることもある。

たとえば、一人ぼっちだった幼児が他人をつねるようになった。

これは「悪」だが、この行動の奥には、「他の子と親しくしたい」という願いが潜んでいることがある。

この願いに気づけるかどうか、その差はきわめて大きい。

□子どもの「悪」が、親や教師に対する「警告」の意味をもっているときがある。

いや、そういう場合が多い。

□現場の教師の努力だけで、現在の教育をめぐる状況がすべて根本的に解決されるということはありません。

しかし、教師は無力ではない。

変革の中心は、やはり教師の日々の実践である。

□学習指導と生徒指導は相互補完関係にある。

学習指導を通して生徒指導が推進され、生徒指導の推進によって学習指導の充実が図られる。

□優れた教師は、学習指導のなかで生徒指導を行う。

□教師は、「否定」のなかの「肯定」を発見しよう。「荒れる」子のなかの「荒れない」部分を。

「できない」子のなかの「できる」部分を。

「停滞」のなかの「前進」を発見しよう。

それが教育であり、生徒指導である。

□子どもが起こす問題も、決して単純ではない。原因は、あれかこれかどちらか、と二者択一ではない。

あれでもあり、これでもある、と考えられることが多い。

その矛盾に気づきつつ、総合的・包括的に対応しなければならない。

□「いのち」の大切さが本当にわかれば、いじめはできなくなる。

「いのち」の大切さを実感する教育は、確実にいじめ防止につながる。

□現代の青少年は、やたらと性の知識だけが先行し、恋愛や人生をまともに語り合った経験を持っていないのではないか。

教師は、正面から、愛や人生を、青少年に語りかけたい。

説教ではなく、体験として、夢として、明るく希望をもって語りかけたい。

□子どもは「場」の空気次第で変わる。

だらけもするし、引き締まりもする。「善」にもなるし、「悪」にもなる。

優れた教師は、子どもたちがやる気になり向上していく、そういう「空気」や「システム」をつくることのできる人である。

□教室の「空気」がよどんでいるときは、担任教師に責任がある。

□人に迷惑をかけなければ何をしてもいいというのは、大間違い。

自分の体や魂を傷つけることは断じてしてはならない。

□「生まれてきてくれて、ありがとう。あなたは、誰も代わることのできない独自の価値をもった存在なのです」

子どもたちに、乳幼児期のときから、体全体で何度も何度も優しく温かく確かに伝えてあげたい。

□子どもを「育てる」という。

しかし、子どもが「育つ」という面もあることを忘れてはならない。

先生がいてくれるから、安心してほくたちは心はずませて好きなことに没頭できる。そういう環境をつくれれば、子どもは自らグングン育つ。

教師は、子どもの生きる力が育っていくための「土壌」としての役割も持っている。

□「教育」とは「教」と「育」という字からなっている。

なのに、先生たちは「教師」と言われる。

「育師」とは言われない。

「育師」の面も併せ持たなければならない。

□教師から問いかけたり、話しかけたりしたのではなくて、自然に、子どもから話し出す。そういう言葉の中にこそ、本当の、その子がいる。

何の話しでも、自分から話し出す、その中に、その「子」が見える。

□「聴く（K）・共感する（K）・一緒に考える（K）・励ます（H）」。

「4打数1安打のコミュニケーション」。

これが基本。これで十分。

□教育相談、別れ際にその子の本音がすべて出る。

□子どもの残虐な犯罪行為や触法行為は、歴史的に見れば少なくなっている。

長い間引きこもったり、リストカットなどで

自分を傷つけたりする、そういうエネルギーを内に向かわせるような問題が増えているのが現代の特徴である。

□子どもたちだけがモラルハザード（道徳崩壊）を起こしているわけではない。

子どもたちは大事な価値規範や道徳を自分たちで編み出すのではないのだから。

□青春期の若者に対しておとながなすべきこと。

①彼らの動揺や反抗を、おとなになるための避けられぬこととして温かく見守ってやる。少し距離をおいて。

②彼らの「極端」を戒め、「決定的な破局に到る暴走」だけは防いでやる。体を張って。

③彼らの情熱が活かされるような社会参加の方法を工夫する。知恵を絞って。

□すべての子どもを「成長する人間」として接しよう。

指導にあたって、あきらめないこと。見捨てないこと。

□非行が成立するのは、3つの「時」が重なった時という。

①イライラして内にうっ積したものが充満している時

②そのはけ口になるような誘発の対象が目の前にある時

③たまたま実行しやすいチャンス（機会）に遭遇した時

しかし、この3つが揃っても、自分を見つめ、抑える「抑止力」が育っていれば、非行は成立しない。

□いじめや不登校が増大してきた原因は、個々の教師や学校にあるのではなく、現代の社会生活のあり方全体にある。

学校や家族のあり方、消費社会や都市社会のあり方、そこでの生活スタイルと人間関係の

あり方全体に、その原因はある。

□今日の教育問題の多くは、その原因・背景が多元的・複合的である。

□子どもにとって一番辛いのは、無視されること。
子どもは、無視されることを避けるために、反社会的なことをわざととして存在を認めさせるという行動に出ることがある。

□子どもはときに、心と反対の態度や行動を示す(反動形成)。
子どもはときに、自分を防衛するために、心と真逆のことを言ったりする。
子どもにも、裏の裏の裏があったりすることがある。

□「こういうふうには叱ったら、この子は、確実に自分で自分のことが好きになれる、そして、「善」へ向かえる」そんな叱り方をしたい。「励まし」となる叱り方をしたい。
どんな教育の方法をとっても、子どもに自信を与えるようにすることが大切。
まずい教育は、間違いなく自分で自分のことを嫌いにすることをしている。

□「明るい子がなぜ自殺？」

いじめられているときの、「不安と怒りを隠すための手段」が「明るさ」だったのだ。いわゆる良い子の明るさは、不安の防衛的性格としての明るさであることがある。

□自分を守ろうとしてひきこもる。

不安だから、自分の周りに城の壁を造る。
現実と接しないことで、傷つくことから自分を守る。
ひきこもることで、傷つくことから自分を守る。(教師は責めるのではなく、そのことを理解してあげたい)

□今、大半のいじめには、何らかのかたちでケータイ(メール)が関与している。
学校から逃げても、ケータイで追いかけられ、子どもは窮する。
早期の情報モラル教育が、子どもを救う。

□いくら子ども(相手)を責めても、トラブルは解決しない。
生徒指導が、責めることに終始していないか。

□校則を守らせることは大事なこと。
しかし、それは人間を育てるためにすること。
校則を守らせることだけに固執し、人間をつぶしたのでは話にならない。

□やしまたろう作『カラス太郎』。
一人の青年教師が、学業が苦手な子どもの優れた点を見だし、その子らしい行動に意味を与えていく。
そのことで、その子だけでなく、いじめていた周囲の子らも変わる。
子どもは活かされ、自信を持ち、力強く生きていく。
時代を超え、私たちに「教育とは。生徒指導とは」を訴えかける不朽の名作。
教師必読の書である。

□他者の命が生き生きと輝くことに、共に喜びを感じるができる人。
子どもを健やかに育てることができる人は、きっとそういう人である。

□子どもの評価は、複眼的視点で行わなければならない。
せっかちに「この生徒はこれくらいだ」と決めつけてしまう習癖はなくさねばならない。

□教師の目は、どうしても子どもの長所より短所に注がれやすくなる。
意識して逆にし、短所より長所に注目するのだ。

そうすれば、子どもの教師に対する心が変わる。そして教師の期待に応えようと、子ども自らが変わっていく。

- 何かをしてくれた教師には、子どもは必ずついていく。
子どもがついてこないのは、教師が何もしていないからだ。
あるいは、教師に期待できないからだ。
問題は、教師の方にある。
- 教壇に立ったとき、声が弱くオドオド、気力が少しも感じられない。
子どもは瞬時に、そういう教師の言うことは聞かなくなる。
逆に、身体や声にハリがあり、自分の心にビシビシ響いてくる、気合いのようなものを子どもが感じれば、学級経営や授業はうまくいく。
教師も「身体」が基本である。
声にハリがない人、目に力がない人、身体に力がない人は、教師には向いていない。
- 「学校が忙しくて、あたし、自分の子どもは放りっぱなしなんです」
これは自慢にならない。
わが子を愛し大切にすることの延長線上に、生徒を大切にできる教育がある。
- 人間、「うん、なるほど」と思ったら、「よし、やろう」となる。
納得し、腑に落ちたから、行動に移そうとするのだ。
教師は、「うん、なるほど」と納得してもらって話し方を身につけなければならない。
- 問題をもつ子を「この子さえいなければ・・・」ではなく、「この子がいてくれるおかげで・・・」と位置づけて、お仕事を進められた東井義雄先生。

たいへん困難なことであるが、その精神、姿勢を引き継ぎたい。

(2) 生徒指導の実際

- 家庭の教育力が衰え、地域の教育力が崩壊し、キレる生徒が出現してきた。
モラルが培われていない生徒が多数出てきているのに、学級は相変わらずの40人学級。
だから、どの学級でも学級崩壊が起こる可能性がある。
経験豊富なベテラン教師にも、その危機は十分あり得る。
「自分には教師としての力量がないのではないか」と、自己を懐疑する必要はない。
- しかし、それでも教師は頑張りたい。
精一杯頑張っ、そして、ほんの少しの生徒が、あるいは大変な子の心のほんの一部が、少しでも良い方向に進めば、それでいいではないか。
問題をすべて解決するなんてことはできないが、それで十分ではないか。
肩の力を抜いて、多くを期待せず、日々笑顔で自分なりに精一杯頑張りたい。
それでいい。それで十分。
- 成果があがらなくてもいい。
教師として最善をつくすことに、喜びと生きがいを感じたい。
- 子どもを「否定」すれば、子どもから「否定」される。
その子を「肯定」すれば、その子から「肯定」される。
「否定」には「否定」、「肯定」には「肯定」が返ってくる。
- 「困った子」は「困っている子」。

- 教師と生徒には適度な心理距離が必要である。距離が近すぎると、礼儀や敬意が失われ、教育が成立しなくなる。もちろん離れすぎはいけないが、接近しすぎもいけない。「三尺下がって師の影を踏まず」昔人の知恵を思いだそう。
- 社会や学校や教師に対する「反抗」は、ほとんどの場合「どうしてこんな勉強しなきゃいけないのか。必要ないじゃん!」という「問い」から始まる。「日本人に英語なんていらぬ」という教科の意味を問う形で現れてくる。一般的な説明では、思春期の子どもはまったく納得しない。教師は「どうしてオレは英語教師になったのか」という、己自身の教科との関わり、生き様を熱く魂を込めて語らねばならない。生徒との「葛藤」を恐れず、自分自身を誠実に人間の見本として差し出すしかない。(思春期の子は、そういう熱く語ってくれる先生を、実は、求めている。)
- 「人には迷惑かけてない。私の勝手でしょ。あんた何の権利があって説教すんの!」援助交際をしている子が、口をとがらせ、教師に食ってかかる。「迷惑かけてないからいい」「自分で決めたことだからいい」等、様々な理屈を並べる。教師の話に耳を傾ける気はさらさらない。「だめだ! だめなことはだめだ」静かに毅然と、「だめだ」と断じること。教師に、動じぬ「落ち着き」と「強さ」がほしい。
- 「暴力をふるった」(観察)
「またか。けしからん、厳しく指導しなくては」(診断)
「何度言ったらわかるんだ。人を殴ることは断じてしてはならぬ」(指導)
この(観察→診断→指導)では、教育のプロとはいえない。観察と診断との間に、「なぜ、この子は、暴力をふるったのか」という「解釈」を行う必要がある。この「解釈」の有無こそ、素人と専門家との違いである。子どもには、子どもなりの「わけ」がある。それをすべて認める必要はないが、大事なことは、その「わけ」を探り、子どもの身になって解き明かすことである。その「解釈」が、子どもを活かす「診断」「指導」を導き出していく。
- 教師は真面目である。それゆえ、子どもの失敗を、「善—悪」の基準だけで評価し、子どもを厳しく追い詰めることが少なくない。「ハッ、ハッ、ハッ」と、その失敗を明るく笑って許してやろう。(もちろん、許してはいけないこともあるが)そういう教師のもとで、子どもは安心して再度挑戦できる。そういう教師のもとで、子どもは壁を乗り越えていく。子どもたちは、「ハッ、ハッ、ハッ」と笑う教師に人間味を感じ、信頼を寄せていく。
- しかめっ面で、ことごとくに「駄目でしょう。してはいけません」という教師。にこやかな笑顔で、「おう、こうしたらどうかな?」という教師。子どもにとっては、大きな違い。あなたは、どちらのタイプですか?
- 「がんばれ!」「～するな!」。教師が子どもに対して口にする言葉NO1とNO2。子どもがより待ち望んでいるのは、「がんば

れ！」ではなく、「がんばったね！」。
「～するな！」ではなく、「～しよう！」。
「七月、暑いのによくがんばったね。さあ、明日から夏休み。学校ではできない勉強に大いにチャレンジしよう！」
こういう言葉を待ち望んでいる。

- 学年集会で生徒指導について20分語ったと自慢する教師がいるが、とんでもない。先生の話しが長ければ長いほど、子どもはわからなくなるのだ。
5分もしゃべられると、子どもたちは混乱し、理解できないのだ。
「一生懸命に教える」というのは、長い時間話すことではなく、言葉を吟味し削り、短時間で子どもにわかりやすい説明を行う、ということである。
短く説明したり、短く指示できる先生ほど優秀である。
ながーいお説教は、力量のない証拠である。

- 理性的に叱り、感情的に喜ぶ。

- 叱る時は感情的にならない。比較しない。
大切なのは、なぜ叱られているかわかるように叱ること。

- せっかく、子どもが仲直りの仕方を学んでいるのに、その機会を教師が奪っている。
「下手な先生ほど、あれこれとする」と指摘されることがある。

- 話をしながら、子どもが自分の内から聞こえてくる「こころの声」に耳を傾け、自分なりの解決法を見いだすことができるようにしていく。
子どもが自分なりの答えを導き出せるようにそのプロセスをうまく支えてあげる。
放課後の教室で、時間をかけて、じっくり支援したい。

- 問題行動を起こす子どもの内面には、共通して「自分への強がり」がある。
自分や自分の家族の弱さを認めることができずに、目立つことを行ったり、乱暴な言動に出ることによって、幻想的に「強い自分」を味わおうとしている。
惨めで無力な自分を認めまいとして、必死に「自己拡大」を図っているのである。

- 子どもが大きなストレスに応じるとき、「閉じこもり」の内向的な反応を見せる場合と、「背伸び」の行動化の反応を見せる場合の二つがある。
「背伸び」し、行動化していく子どもに対しては、妥協できない枠組みを厳に示し、走り続けている状態を止まらせ、堅実な生活に方向付けてやる。
ときに対決していくが必要になる。

- 極端な「背伸び」の生き方をする子どもは、本当は親に向けるべき恨みつらみの感情を持っている。
それをストレートに出せず、その代わりに、八つ当たりの学校で出していると考えられるケースが多い。

- 問題を起こす子らは、おとなが援助・指導しようとする「拒絶」してくるが、ほっておくと、「自分は見捨てられた」と落ち込み、心を閉ざす。
彼らは周囲に対して「ほっといてくれ」という強硬な態度に出るが、内心は「助けてほしい」と深く深く願っている。

- いきがりや虚勢は、突然止まるものではない。
ゆっくりと時間をかけて安定していく。
いつのまにか立ち直っているものである。

- 教師が、彼らの粗野な言動に振り回されずに、まずは、その内にある彼らの絶望感、無力感

を感受すること。

それができれば、関係性が少しずつ微妙に変化していく。

- 思春期の子どもは、優しく包み込んで傷を癒やしてあげようというだけではダメである。彼らは、「学業での脱落」や「進路不安」などで、深刻な無力感や疎外感を抱えている。彼らが望むのは、「こうして準備し、こういう方向に向かえば幸せになれるのだ」という「枠組み」と「支え」である。
- あなたの「個性」は必要。あなたはこの学校に必要。あなたが苦手なあの先生の「個性」も必要。お互いを否定しあってはいけない。職員室が均質な個性の集団では、多様な子どもたちに対応できない。色とりどりの個性派教師が集まっていることで、「学校力」は発揮される。あなたも必要。違うタイプのあの先生も必要。「持ちつ持たれつの職員室」を。
- 「全教員が一致した対応を！」と、よく言うが、それは無理であり、誤りである。確かに「理念や方向性」は一致させねばならない。が、「対応方法」や「切り口」は一致させなくてもよい。具体的な対応を一致させようとする、かえって全教員のパワーを発揮できない。一人ひとりの教員の個性や力量にあった対応策が様々にあった方が、多様な子どもへの多彩な対処に有効である。指導に温かみや細やかさ、そして奥行きが出てくる。
- 教えないで怒鳴ることが仕事だと思っている部活顧問がいる。間違えないでいただきたい。気づいていただ

きたい。

部活顧問の仕事は、「教えること」と「励ますこと」である。

怒鳴りちらし、子どもの自尊感情を低めることではない。

- 「上手いやつだけの部活じゃねえか」
ずんだれたカッコウの男子生徒が憎しみを込めて叫ぶ。
中学校は選抜以前の生徒が寄り添って学ぶ義務教育最後の場である。
上手な子だけでなく、そうでない子どもにも「光」をあててほしい学舎である。
勝たなくていい。勝つことが最大の目標なのではない。
勝つことより、すべての子どもを活かすことにこだわってほしい。
- 「教えないで叱る」教師は案外多い。注意しよう。
「教えないでどなる」教師もいる。論外である。「教えて、ほめる」あたり前のことを、取りもどさねばならない。
- ほめることには、その子の可能性を発現し、成長を促す効果がある。
- 子どもたちが、「何をしたらいいか分からない」という空白の時間があればあるほど、そのクラスは騒然となる。
することがわかれば、自然、子どもは集中する。
- すべきことがわかると、どの子どもも一生懸命取り組むようになる。
集中できないのは、すべきことがわからないからだ。
- 「何のために」が失われると、子どもには「やらされる」という気持ちしか残らない。何のために掃除をするのか。何のために学ぶのか。

その「目的」を優しく穏やかに語ってあげたい。「～するという」行為の中に、「何のために」という心が込められるとほんものになる。

□指導の難しい子どもに巡り会ったとき、その問題点を何とかしてやろうと必死になればなるほど、たいていは逆効果になる。その子のもっている素晴らしいものに気づいたとき、子どもの変貌が生まれ始める。

□周りの人々（先生や級友）から信頼されていることを実感できたとき、生徒の心は安定する。

□思春期には鬱屈した感情を持ちがちであるが、その解放は「言葉」ではなく「身体」を通じて行った方が、難なくできる。中高生が、スポーツ・武道・ダンス・和太鼓などに打ち込める機会を作ってあげたい。体を動かすことの喜びを中高生が心から実感できれば、道は大いに拓ける。

□特別支援を要する子が、「蘇生」のきっかけとなることがある。その子によって、まわりの感性おとろえた、子どもや、教師や、親が、人間が生きることの根源を考えさせられ、人間として真に目覚めるからである。

□問題の子の親に限って人の意見を聞けない。むずかしい子どもの親は、たいていむずかしい。「親を変えなければ」という発想は通用しないことが多い。

□問題の子の親を説得するのは逆効果が多い。ほとんどの場合、互いに言い合いになり、親は納得せず、敵愾心を持つ。自分の育て方で問題児になったという考えは、認められないのである。子どもの問題の要因が自分であることは認めたくないのだ。

親が自ら気づくよう根気よく援助・応援する方法が一番よい。

十分に親の主張を聞き、受容し（是認ではない）、ほんの少し情報を提供する。

「こういう方法はいかがでしょう」と、少し、具体的なアドバイスをしておく。

問題点を指摘して、親の考え方が間違っていると、正しくないといって納得させようとすると、かえって興奮し否定的になる。それが人間である。

指示的、説得的方法ではなく、受容し援助する方法を。根気よく。

□「・・・ただ、あの子が先生のこと好きやし、先生のこと信じてるんよね」
烈しく学校を攻撃する母親が、そう言って急にシュンとなった。
最後はやはり、先生と子どもとの信頼関係ということか。

□不登校の原因を厳しく追及してしまうと、教師は親と生徒を責め、子どもは学校と親を責め、親は学校と子どもを責め、各自は各自で自分を責め苛む。
原因追及に徹すると、苦悩の悪循環をつくってしまう。

□緊急の場合は、出席停止や別室指導の厳罰主義も必要となろう。
しかし、子ども参加のいじめ防止活動をいかに構築できるかが、基本である。

□心が癒やされて初めてやる気がでてくる。
やる気がでてくれば、具体的なアドバイスがほしくなる。
やる気がでる前のアドバイスは、むしろマイナスである。

□「大丈夫。大丈夫だよ」と言われて育った人は、様々な事態に落ち着いて対応している。

不安なときに、「大丈夫よ」と声をかけてくれる、その優しさが子どもを強くする。

- 緊張感のない生活から、力強い「生きる力」は生まれにくい。
一日中緊張はいけませんが、ときに「集中！」と声をかける必要はある。

- 「罰」や「成績評価」による統制では、本質的な問題解決にはならない。
やはり、教育本来の「魅力」によって、生徒を引っ張っていくほかない。
その魅力の中心は、自分が「教室」で活かされているという生徒の実感であろう。

(3) いま、子どもたちに伝えたい心・生き方

- 夢を描けない人には創造や成功がもたらされることはない。人間的な成長もない。
いくつになっても夢を語り、明るい未来の姿を描ける人間でありたい。

- 素晴らしい人は逆境のなかで少しもくじけない。昂然（こうぜん）としている。
得意のときに自分を慎み深く反省し、逆境のときに自分の誇りを失わない。

- 「マイナスの時代」をどう生きるかが、あなたの人生を決定する。

- 真の成功者は、何度も失敗を重ね、挫けず失敗から学び、成功を勝ち取っていった。
一度も失敗をすることなく成功した人など、まずいない。

- 心から尊敬できる「師」がいるかどうかで、成長のスピードはグンと変わる。

- 議論で相手を言い負かしても、相手の心には必ずしこりが残る。

恨みを残さない話し合いを。

- 心配な事があるのは、あなたが「生きている証拠」です。
悩むのは、あなたが「もっとよく生きたい」と願っているからです。
どちらも決して悪いことではありません。

- 自分の「本心」「本音」に素直に生きる。
自分の人生、「基点」「起点」は必ず自分に置く。

- 他人と過去は変えられない。
変えられるのは、自分の「こころの持ち方」と「これから」。

- 頑張っているのにうまくいかないときは、「努力の方向」と「努力の方法」が間違っていないか見直してみる。

- わかりあえない人、苦手な人がいるのは仕方ない。
人間関係の悩みで深刻になりすぎるのはもうやめよう。
失礼にならない程度に、必要最小限つきあえば、それでいいのだ。

- 「憧れの人」の真似をする。
「なりたい自分」になるための、一番の近道。

- こころが安らぐ、自分だけの息抜きの場所をつくっておきたい。

- 「花」は、草が化けると書く。
そう、生まれたときから咲いている花はないのだ。
最初はみな草で、努力して努力して花へと成長するのだ。

- 心の眼が清らかであれば、見るもの聞くものすべてが「教科書」となる。

- 自分だけが悲しい思いをしているということはないのです。
すべての人に、悲しみは訪れているのです。
ただそれを、どう捉えるかに違いがあるのです。
- 私に起こることはどんなことでも、「必要、必然」。
起こったことを受け入れ、包み込み、前へ進みだす勇気を持ちたい。
- ストレスがなく、いつも明るく元気で楽しそうに見える。
いつ見ても朗らかで笑顔を絶やさず、すべてにプラス発想をする。
人相がよく、そばから見ていてとても幸せそうに見える。
なぜか「成功」している人に共通すること。
- 「痛み」を知った人は、優しく大きくなる。
- 他の人と協調し、調和的ではあるが、自分の内側に自分なりのしっかりした芯になるものを持っている、ということが大事。
- 成功への転機は、ピンチのあとに来ることが多い。
- 動いていれば、そのうち自分にあったことに出逢うことができる。
仕事でも、夢でも、なんでも、まず自分から動いてみることです。
- 腹をたてず、嫌なことにはかかわらず、明るく元気に優しい心で生きていく。
心おだやかに生きていく。
- 自分の心を颯爽、ハツラツとした状態にしておくには、消極的・否定的な言葉はできる限り使わないことです。
- 不運だと思えば不運になる。
幸運だと思えば幸運になる。
- 人あつての自分。
自分一人でここまで来れたわけではない。
- できない理由を考える前に、できる方法を探してみよう。
- 秀吉は信長から下足番を命じられて、日本一の下足番になろうとした。
すると信長は、秀吉を下足番のままにできなかった。
どんな仕事でも本気・本腰で取り組めば、その先に新たな大きな仕事が待っている。
- 自分を磨き高めるためには、「大きな人」に会うことです。
- 「理想の自分」はもちろん大事だが、自分を傷つけるほどに固執しない。
「次善の策」を受け入れる余裕はいつも持っていたい。
- 平凡なことを一生懸命する人が、非凡な人となる。
成功は、当たり前前のことを当たり前にするなかで生まれてくる。
- 成功する人は、「力まず」始める。しかも「すぐ」始める。
- 当たり前前のことを、当たり前としか感じないうちは、成功しません。
当たり前前のが、なんてありがたいんだと感謝できるようになれば、成功します。
- ニコニコ笑って待てる人はかなり強い。
- 「きつい」と感じる時、人間は成長しています。

- 「きついなあ、つらいなあ」と感じている人は力がついている人なのです。
「きつい、つらい」と感じるとき、「あっ、私、成長してるんだ」と安心しましょう。
- 疲れたら、とにかくたっぷり眠りましょう。一晩ぐっすり眠れば、何かが変わるものです。
- 他を激しく責める人は、正しい場合でも周囲から嫌われる。
- 偉大な人々は、アイデアが優れていたばかりではない。
偉大な人々はみな、汗をかいて熱心に働く人間でもあった。
- 昨日の嫌なことは、忘れましょう。
昨日のことで、今日を台無しにするのはよししましょう。
- 他人は自分が思うほど、自分の欠点には関心がない。
- 忙しい人ほど、時間をきちんと守っている。
時間を守る人ほど、人から信用され、成功している。
- 言い訳をしない人が、伸びていく。
- 成功した人の事例を学ぶことが重要。
- 成功した人は、必ず「基本」を踏まえた上で、自分の性格に合わせた修正を施している。スポーツでも何でも「基本」を否定して、個性的な所から入った人は必ず行き詰まる。
- 賢明な人を見れば、少しでも近づこうと思う。
賢明でない人を見れば、自分もそうではないかと省みる。
- 言うべきときではないのに言う人間は愚かだ。
言うべきときなのに何も言わない人間は卑怯だ。
- 感情が爆発しそうになったら、意識して口を閉ざすこと。
顔の表情もできるだけ変えないこと。
できれば、その場を離れること。
- そんなに大した人間にならなくていい。
ほんの少し、誰かのお役に立っているという生き方をしてほしい。
- クーラーを使わない日があってもよい。
暑さ寒さぐらい、時々我慢することがなければ、人間、「不幸せ」になる。
- 人生を正しく生きれば、運命はグングン動き出す。
夢のほうから、君たちのところへ近づいてくる。
- いいことがあった人には、素直に、「よかったね」と喜んであげよう。
- 嫌な人に出会ったら、「自分はその人と同じ事をしていないか」と振り返ろう。
嫌な人を、自分の鏡にしよう。
- 友情は、お互いに尊敬できるとき、生まれるものである。
- どんなことがあっても、自殺と、殺人はしてはならない。
人間、望ましからぬ事件に遭遇しても、いつかきっと希望を取り戻すことができる。
しかし、自殺と人殺しは、取り返しがまったくつかない。
- 言葉の危機は、たしかに心の危機になる。
「キモい」「うざっ」などの殺伐とした言葉は断じて使うべきではない。

- 子どものうちに「よい耳」を育てることができれば、一生得する。
静かにしっかり人の話を聞ける子は、きっと賢い子になる。
- 小賢しく他人の非をあげつらうような人間にはなあってほしくない。
自分自身の至らなさの方を深く謙虚に省みるといった姿勢を持ってほしい。
- 人間は素質や能力がないことを、あまりしたいとは思わない。
「～になりたい」と願うことは、それを実現する能力が備わっているということである。
- 「感謝の心」が「幸福」を招く。
「素直な心」が「進歩」を招く。
- 「勤勉」は、人生を充実させていくために必要不可欠なことである。
勤勉を通じて人間は、精神的な豊かさや人格的な深みを獲得していく。
- 「夢」へ達しようと努めることが大切なのです。
「夢」に近づこうとする日々が私たちの心を鍛え、磨きます。
- 自信のない人間が、自分より弱い者を見つけて、その人をいじめて優越感を味わう。
いじめは、どこかに心の傷を持っている寂しい人のすることです。
- 恋は、自分の持っていない「きらめき」を相手のなかに見、ときめくこと。
相手が美しく素敵に見えるから、自分もそれにふさわしい立派な人間になろうとする。
恋は人間の心を清くし、人間を成長させる。
- 愛は恋より永続的なものである。
相手の欠点が見えるようになってくると恋は冷めていくが、愛は変わることがない。
欠点を包み込み、その上で、その人間のいいところを探す。限りなくいたわる。
- 明るい希望を持ち、努力を続ければ、必ず道は拓かれる。
「甘ちょろい」と鼻でせせら笑う人がいるが、これはやはり確かな真実である。
- 人生はツイてないことばかりが続くものではない。
いいことも必ずやってくるのが人生です。
- 苦しいときの努力は必ず後に実を結び、あなたの人生を豊かにする。
あなた自身の人間性を高めてくれる。
- やったことはすべて無駄にはならない。
- 一人でなければ味わえないことがある。
たとえば、誰かがそばにいれば、「空想」や「想像」はしにくいだろう。
たとえば、ラジオと本は、一人の方が味わい深いだろう。
ひとりぼっちの時間をつくろう。
ひとりぼっちを楽しもう。
- 憎悪は必ず拡大再生産される。
- 結局、自分の良心に恥じないように生きるということに尽きる。
- 人間は誰でも「天使」にもなれば、「悪魔」にもなる。
状況によっては、私もあなたも「悪魔」になるという怖れをいつも持っていたい。
- この世に必要なない人は、一人もいない。
どんな人であっても、世のために必要だからこの世に生まれている。

- 自分がよいと思うことをやり、悪いと思うことをやめること、それが勇気です。
- 悲しんでいる人がいれば、その人の話をそつと温かく聴いてあげましょう。それだけでもいいのです。
- 自分がされて嫌なことは相手にもしない。自分がされたらうれしいな、と思うことを相手にやってあげる。つい忘れてしまう、あたりまえの「他人から好かれ信頼される方法」。
- 相手に浴びせた罵声、こちらは忘れているが、言われた方はいつまでも覚えている。表面上は和解しても、相手の心の怒りや悲しみは決して消えることはない。
- 明るく素直で前向きである。勉強好きである。持続力がある。成功の3条件。
- いつまでもマイナスの出来事にとらわれていても仕方ない。そこから学べることは何か考えて、受け入れ、感謝し、最初の一步を踏み出す。そこに、より成長した「確かな自分」がいます。
- エゴ(自我)があり、「自分は特別な人である」と周囲に思われたいこと。うまくいっている人をどうしても嫉妬してしまうこと。動物と違う人間だけの悲しい特性。あるのは自然だが、でも人間だからこそなんとかしたい。
- あなたの良心は、あなたが何のために生まれてきて、どんな役割があるのか知っている。ガン、ビ・ビ・ビときて、胸がワクワクと
- きめいてしょうがないこと。それは多分、良心からのメッセージでしょう。
- 自分の気持ちに正直に生きるために、「断る勇氣」も持たなければならない。周囲のすべての人から「いい人」と思われる必要はありません。
- わかりあえない人とは、わかりあえないままでいい。自分にとって本当に大事な人でないならば、どう思われようと、何を言われようと構わない。本当に理解しあえる人はごくわずかでいい。こう腹をくくってしまうと、スーッとラクになる。
- 意識的に明るく元気な声を出そう。元気な声は自分にも響き、しだいに心を明るい気分に変えていく。
- 一人でいることを恐れない強さが必要。
- 4つの絶対的信頼
- ①生きることへの絶対的信頼
生きていれば、悲しいことやつらいこともある。しかし、必ず嬉しいことや楽しいことに出会えるのだよ。生きていることは素晴らしい。
- ②善行への絶対的信頼
よいことをすれば、必ずよいことが起こる。
- ③努力への絶対的信頼
努力すれば、必ず報われる。神さまは頑張る人には手を差しのべる。周りの人は頑張っている人をほっとかない。努力している人はいつか必ず認められる。
- ④継続への絶対的信頼
続けていれば、少しずつ確実に力がついていく。

- 親が望むことは、君が幸せであること。
何も難しいことをすることはない。自分を大切にしているだけで十分なんです。
- プロ野球選手を夢見て、烈しい練習を続けている高校生がいました。
夢は叶いませんでしたが、いま少年野球のコーチとして幸せな人生を送っています。
夢は、自分が思い描いたとおりのかたちで実現するとは限らないのですね。
ただ、夢に向けての努力は、あなたを決して裏切らないのです。
想像していた以上の素晴らしい未来を、「夢への努力」はあなたに与えてくれるのです。
- 「これじゃ書き足りないかな。遠慮しすぎかな」メールでの書き込み、それくらいで十分です。
相手からきついメールが来たときは、相手にしないこと。
どうしても返信をしたときは、必ず一晩おいてから。
- 拒食症の女性たちの共通点は、真面目で繊細すぎること。
「あら、太ったんじゃない?」「そう?最近、あたし、ケーキにはまっている」
笑って、そう言い返せるくらいのたくましがほしい。
- 「報われない努力」というものはあり得ない。
努力の結果がすぐに現れないことはあるが、功德となっていくか必ず自分に返ってくる。
- 「控えめ」の美しさを。
- 「よかったね」と言っていると、不思議とよくなる方向に物事が動き始める。
人生をいいこと一杯にするには、精一杯明るく喜んでいなくてはならない。
- 「きれい」という自己主張を自慢げに言って得をすることはありません。
- 人間、言葉も態度も、ハツラツ颯爽としていなければならない。
- 他人の批判をするより、自己省察。
- 「感謝」と「喜び」で人生を考えることを習慣化しよう。
- すべてを時代のせいにしていれば、それは楽である。
しかし、何にもならない。何もいいことはない。
- 努力のないところに幸運は来ない。
- 日ごろから正しい行いをしていれば、必ずどこからともなく救いの手が伸びてくる。
- 「実際の自分」より自分を良く見せてしまった場合、人はいつも不安になる。
- 努力もせずに嘆かないこと。
- 現実、思ったほど大変ではない。
現実、不安な人間が感じているほどつらいものではない。
- 今、あなたが心配していることが実際に起きる確率は、きわめて低い。
- 「環境が悪いから何もできない」と言う人は、本当は何もしたくない人なのです。
- 人から信じてもらいたければ、ガチャガチャ言わずに、行動で示すのがいい。
真摯な行動が、人の心に最も響く。
- 「清潔好きの感覚」を幼いうちに身につけたい。

- 「清潔好きの感覚」が、人間としての「節度」「清純さ」「よい品性」につながっていく。
- 自分がなした善行について吹聴しない人を、人は信頼する。
 - 「こんなこと意味ない」と否定して、何もしないことが、最も人生をムダにする。
人生をムダにしないコツは、ムダと思えることにもとりあえず果敢に挑戦することです。
 - 自分が笑顔でいられる状態を、自分で意識的に作り出すこと。
 - ケンカ別れするのではなく、少しずつ離れ、気がついたらいつのか遠ざかっていた。
相手を傷つけず、自分も傷つかずにすむ別れ方を心がけよう。
 - 仲間といつも群れていると、自分は何がしたいのかを、自分でしっかり考えなくなる。群れずに一人で行動できるようになってこそ、素敵な大人になれる。
 - 誰かからほめられたこと、感謝されたことなどをノートに書いておくといい。
その習慣が、あなたをより素敵な人間にしてくれます。
 - 大人になるというのは、思うようにならなくても笑顔を失わずに生きていけること。
 - 人に迷惑をかけなければ何をしてもいいというのは、大間違い。
自分の体や魂を傷つけることは断じてしてはなりません。
 - 身体は親からいただいたもの。
傷つけるのは親不孝になる。
 - 他の人を愛し、助けっていると、自分も他の人から愛され、助けられるようになる。
 - 素直な人の方が、どんどん伸びる。
人の話をまずは反発しないで聞き、そこから、自分に必要なことを吸収しようとする姿勢が成長をもたらす。
 - 子どもの間に、勤勉努力の習性を身につけることができるかどうか。
この一点で、充実した幸せな人生を送ることができるかどうかが決まる。
 - 「怖れ」を知らぬ人間は、傲慢となり、いつか大きな過ちを犯す。
人間は万能だという思い上がりを捨て、怖れながら生きていたいと思う。
怖れながら、慎み深く生きていきたい。
 - 人には「怖れ」や「畏れ」が必要。
 - 成功する人は「発想」が違う。
成功する人は、口から出てくる「言葉」も違う。「態度」も違う。「行動」も違う。
君よ、その「違い」を見抜き、素直に取り入れるのだ。
 - 後悔は後ろ向きだが、反省は前向き。
後悔ではなく、反省をするべきである。
失敗の原因を分析し、反省することが、次の成功につながる。
 - 人間は、困っている人の気持ちに「共感・共苦」し、その人のために何か役に立てることができた時、生きる喜びを感じる。
一番になることより、「共感・共苦」し、他者のために役立つこと。
それが人間に生まれてきた幸せである。
 - 自分を必要としている人がいる。

自分はだれかの役に立っている。
だから、私がここに存在しているのだ。

している。
立派な人は耳がいい。

エリートとは、その優れた才能を、社会の中で恵まれていない人たちのために使う、という決意をした人間のことである。

急いで疲れを和らげようとする時には、一人でぼんやりすること。
慢性的な疲労を根本から癒やすには、人との関係を楽しむこと。
人は人との関係のなかで楽しいことをするという「充実」がないと癒やされない。

「このままではつぶされる」と思ったら、自ら生きる場を変えればいい。
生きる場が変われば、幸せな生き方の形が様々に表れてくる。

臆病さ、慎重さに裏打ちされていない勇氣は、単なる蛮勇である。

一流人はみな、きちんと片づけができる、という。
一流になる人で、だらしない人はいない、という。
身の回りの整理整頓能力が高くないと、どの世界でも一流にはなれない。

いつも控えめで、頭は低く、得意の時には己を抑制して淡然と振る舞う。
「あなたからお先にどうぞ」と互いに譲り合う、慎ましさ。
現代の日本人が取り戻したい美徳「謙虚さ」。

落ち込んだときは、成長するチャンスでもある。
絶望の中で一生を支えるような言葉や人に出会ったり、自分の本当の気持ちに目覚めたりすることが多い。

誠実勤勉で善行を惜しまない人物が、いつまでも不遇にとどまることはない。
怠け者で自己のことしか考えない傲慢な人間が、いつまでも栄えていることもない。

人生の「不幸」は、ひるがえって、いつか必ず当人の「財産」となる。

この世の中にあるすべてのものが、生きていくために必死に努力をしている。
「努力すること」は、自然界の姿であり、何ら特別なことではない。
「努力すること」は、生きていくために当たり前のことである。

遠慮とは、遠くまで考えを及ぼすこと。
遠くまで考えを及ぼす「遠慮」は、当然、対立の要素を減らす。
遠くまで考えを及ぼす「遠慮」は、当然、互いの生活をふくよかで楽しいものにする。
いま、日本人が忘れかけている「遠慮」。
これからの日本人に大事な「遠慮」。

どんなことも、自分にとって必要だから起きている。

不安のない人生、そういう人生はありません。

いつもどこでも「ありがとう」と言うように、言われるように。

聡明の「聡」は、耳偏がついている。耳の賢さである。
聡明の「明」は目の賢さだが、耳の方が先行

近道と回り道があるとき、効率主義の現代人はどうしても近道を選ぶ。
しかし、人生においては、近道が正しい道と

は限らない。

- どんな時に笑うか。どんなふうに笑うか。
笑い方に人間性が表れている。
- お金は、よい人生を送るための手段であって、
人生の目的ではない。
- はやし立てたり、傍観する行為も、りっぱな
いじめである。
- 人の心の痛みや切なさを感じ取ることのできる
豊かな想像力はあるか。
想像した優しく思いやりのある感情を行動に
移すことのできる実践力はあるか。
- 人生を深く豊かにするためには、ただ受け身
だけではなく、あえて挑むとか、打って出
るといふことも、肝要となる。
- 人間は何か間違いをしでかして、初めて慎重
に注意を払うようになる。
「今回の間違いは、確かに痛かったが、このこ
とがなかったら、もっと大きな痛手を受ける
ことになったかもしれない」と考えるといい。
- 人生、いかなる時もくじけることなく、努力
を積み上げていけば、いつか、「一直線に駆け
抜ける日」が来る。
- 尊敬する人を、一人でも二人でも多く持つこと。
そのことが、あなたの人生を支え強固にし、
より豊かな充実したものに深化させる。
- 青春は、鍛えるためのものだ。
楽しむだけじゃ、もったいない。
- 失敗してもいい。失敗の数を重ねた者ほど成
功する。
失敗をおそれる者、失敗にくじける者が、本

当の失敗者である。

- 行儀の悪い人は、結局、どの世界にも通用し
ない。
せいぜい、一回まぐれで勝つ程度である。
いずれ、行き詰まる。
- 目標のない人生は、人生とは言えない。
- だれの人生にも、どん底の時が、一度か二度
はある。
それを通り越せば、よいことが続く。
- ヒーローと言われている人は、古風で単純な
日常生活を送っていることが多い。
そのなかで、激しい好奇心を持ち、恐ろしい
ほどの勤勉・努力の積み上げを行っている。
- 何に対しても型破りで、決して模範生とはい
えないが、卑しいことは断じてしない。
失敗をしても挫けず、いつも明るく嬉々とし、
正々堂々とした清々しさがある。
そんな爽やかな逞しい若者であってほしい。
- 「静思(静かに思う)」という時間を1日の最
後にもつといい。
日記をつけながら、「静思」の時をもち、自分
の良心の声に耳を傾けると、悔いのない人生
を送ることができる。
- 詰めに成否がかかっている。
物事を成すには、最後の5日間(5分間)が、
肝心である。
- 人間は弱い。
「杵」というものがないと、つい、とめどがな
くなる。
自分で自分にあてはめる「杵」を作れるよう
になると一人前である。

- 歴史を調べるとわかる。退却も立派な作戦である。
なんら恥ずかしがることはない。
- 他人のことを羨まず、「いま苦しいのはむしろ幸せ」と考えることができる人は、必ず大きな人となる。
- 静かに行く人の方が、遠くまで行く。
静かで地道な人が強い。
- 天が与えてくださる「環境」に無駄なものはない。
侮られ、馬鹿にされ、冷笑された「環境」があったからこそ頑張れた、そして幸せになれたということが人生には多々ある。
天が与えてくださった環境に不平不満を言うのでなく、そこに「意義」を見つけること。
- 「辛い」という漢字は、「+」の上に「立」と書く。
そうだ、辛い日々は、必ず、笑える日につながっているのだ。
- 現代文明は、たしかに「スピーディ」さと「便利」さをもたらした。
その反面、人間から「待つこと」「耐えること」「静かに考えること」といった習性を奪ってしまっている。
どっぷりつかってはならぬ。人間を見失わないように。
- 希望を失うことは、生きる力の喪失に直結する。
- 泣いていい。ああ、思いっきり泣くがいい。
「泣く」とは、「? (さんずい) のあとに立つ」と書く。
泣いて泣いて泣いた後、人は立ち上がるのです。
泣いたあと、君も必ず立ち上がれるのです。
- 「感謝」の「謝」は「言葉で射る」と書く。
やはり、言葉に出さなきゃ、感謝は伝わらないということか。
- 「光る言葉」と書いて「誉める」。
なるほど。私の口から「光る言葉」は出ているか。
- 「吐く」は、「口」に「+」「-」と書く。
口からプラスやマイナスのことがたくさん出ている状態であろう。
ここで、マイナスのものを出さずに、プラスのものを多く出すとどうなるか?
なんと、「叶う」になる。
マイナスの言葉や心を出さずに、プラスを多く出すと夢は叶うということか。
- 人生には逆転、また逆転がある。
- 人生には敗者復活のチャンスが用意されている。
人は必ず再起できる。
- 「礼儀正しさにまさる攻撃力はない」(城山三郎)
どのような攻撃力も礼を尽くすことには及ばない。
- 何のために学ぶかって?
決まってるじゃないか。世間で言う、良い学校に入るためじゃないぞ。
そんなちっぽけなことのために勉強してるんじゃない。
たった一度の人生を、人間として豊かに生きるためさ。
たった一度の人生を、人間としてまぢがえずに、充実させて生きるためさ。
そのために人間は学ぶのだ。
君よ、学べ。大いに学べ。
- どこの学校出身かで君のことを評価する人は、きつというる。

端から冷たい目で君のことをバカにする人も、きつといる。

しかし、実社会に出てみれば、学歴は何の役にも立たぬ一枚の紙切れにすぎない。

実社会では、人間は常に、「今、何ができるのか」「今から、何をしつつあるか」で評価される。肩書きではなく、実力で評価されるのだ。だから、名門校を出ていても、仕事のできないヤツはやがて相手にされなくなる。

だから、ほんとうは、どこの学校だって構わないのだ。

君を受け入れてくれた学校を、「オレにとっては日本一の学校なのだ」と信じ、感謝し、喜んで、その学校でおもいきり勉強すればいいのだ。

そうやって実力をつけること。

実力をつけるために、「一生勉強 一生青春」の心を持ち、学び続けること。

どこの学校であるかが重要なのではない。そのことだけが重要なのだ。

□大変なことが次々に起こる。

ひとつ山を越えたと思いき、ホッとしたところに、また次の新たな山。

嘆くことはない。泣くことはない。

それが人間の一生なのだ。それが人生なのだ。「来たな」と思えばいい。一々うろたえていてどうする。

□いつでも元気よく、「喜んで！」と言おう。

世界の一流の人は、いつも上機嫌。

「喜んで！」と上機嫌で、次の山に淡々と挑んでいけばいい。

運が必ず好転します。

□何があってもクヨクヨせず、明るく受けとめようとするクセがあるなら、しめたもの。

何事にも感謝のできるクセを持っている人は、大したもの。

ありがとうございます。

ありがとうございます。

明るく、ありがとうございますと言うクセのある人は、必ず幸せになる。

きわめてシンプル。きわめて素朴。

しかしきわめて確実な幸せの法則。

□いろいろと罪なことがあるが、一番いけないのは、人をつまずかせること。

とんでもなくイヤな悪い人がいても、あなたがその人を裁き、その人をおとしめるようなことはしてはいけない。

その否定的な思いが、必ず自分に戻ってくるから。

怒り狂った心は、相手ではなく、むしろあなたの魂を焼き尽くすから。

イヤな人がいれば、その人から静かに離れればいい。

戦う必要はない。離れるだけでいい。

その人の心が清くなることを祈って、遠くからただ眺めていけばよい。

□自分が人からおとしめられる目に遭った時は、そのような出来事を招いてしまった自分のあり方を反省する。

自分をおとしめた人を恨んだり、逆襲しようとしな。

不用意な言動で、人の恨みを買うようなことがなかったのか、あるいは、自分に傲慢さがなかったのか振り返る。

そして、サッと反省したら、いつまでも自分を責めたりしない。

相手を許し、自分もまた許す。

□悪口を言うのが好きな人は、幸運が逃げていく。

人をほめることが好きな人は、いつか幸運が転がり込んでくる。

□感情を出しすぎてはいけない。

感情を抑えすぎてもいけない。

中庸を守ること。

すべては、バランス、バランス。
いつも、どこでも、何に対しても、バランス。

- とんでもない出来事に出会おうと、不幸がやってきたと気が動転してしまう。
やはり、人生「一寸先は闇」なのだと、絶望のどん底に落とされる。
だが、騒ぐな。動くな。
どん底で目をこらしてじっと見つめよ。
その恐ろしい出来事の中に、とんでもない宝物が隠されているかもしれない。
「不幸」という仮面をかぶってやってくる幸福が、確かにこの世にはある。
「一寸先は光」なのだと気づかされ、希望を持てる日がある。

- 願施（がんせ）。
人にお金やモノではなく、笑顔を施すこと。
これは誰にでも実行できること。
自分の顔が、他人への怒りや、やっかみなどで歪んでいないか。
自分の顔が、やわらかいあたたかな笑顔になっているか。
願施。
誰にでもできる施し。

- 自分がいま生きている境遇は偶然ではない。
必ず意味がある。
あなたを幸せにするために、その境遇が与えられている。
人を羨ましく思う必要はない。
自分に与えられた境遇に感謝して生きればいい。

- 失敗しないように、と考えるからいつまでもスタートできない。
必ず成功させよう、とするから体がガチガチになってしまう。
ブレずに一貫性を持たせよう、とするから何かしらつらく苦しい。
若者よ、考えすぎるな。

やりたいことを思いっきりどんどんやってみたまえ。

頭の中で考え込んでしまっているのは、結局、何もできない。

人間は、つまずきながら学習するのです。

人間は、つまずきながら成長していくのです。
10代、20代、何にでも挑戦してよし！何度でも失敗してよし！

その時その時を明るく楽しく精一杯に生きれば、それでよし！

- 君よ、一日中、部屋に閉じこもって、何をしているんだ。

若者が、自分の体を甘やかしてはいけない。

歩くのだ。階段を登るのだ。何かスポーツをやってみないか。

快適で便利になるばかりの世の中。

意識して日常生活のなかで身体を鍛えなければダメだ。

どういう道に進むにせよ、最大の資本は健康な体。

汗をかかない青春では、輝く未来は期待できない。

- 愚痴を言う人より、黙々と笑顔で生きている人を友にしよう。

愚痴やうわさ話しをするより、友と大きな夢を語り合おう。

愚痴は「闇の世界」を、夢は「光の世界」を引き寄せる。

○ おわりに

私は、以下の先生方から多大な影響を受けました。

東井義雄先生、佐藤学先生、吉本均先生、野田茂先生、村井実先生、和田修二先生、児島邦弘先生、河野重男先生、永畑道子氏、外山滋比古先生、佐々木正美先生、町田宗鳳先生、梶田

叡一先生、曾野綾子氏、倉田侃治先生、藤田英典先生、上田薫先生、押谷由夫先生、斉藤孝先生、向山洋一先生、汐見稔幸先生、刈谷剛彦先生、河合隼雄先生、大村はま先生、外山滋比古先生、七田眞先生、有田和正先生、城山三郎氏、渡辺和子先生

以上の尊敬する先生方のお考え・お言葉を学び、咀嚼し、私の教育体験を織りまぜて、再度紡ぎ出したものが本論文となります。

教師としての実践的指導力を高めるため、以上の先生方のご本を実際に手に取り、読まれますことを心よりお勧め致します。

【主な参考文献・引用文献】

- 〈1〉東井義雄『根を養えば樹は自ら育つ』、柏樹社、1976.
- 〈2〉佐々木正美『佐々木正美の子育てトーク』、エイデル研究書、2001.
- 〈3〉日本の教育を考える10人委員会編『今、義務教育が危ない!』、ぎょうせい、2007.
- 〈4〉八島太郎『からすたろう』偕成社、1979.
- 〈5〉ひすいこたろう『漢字幸せ読本』KKベストセラーズ、2007.